

わたしはイスラエルの父となり、エフライムはわたしの長子となる

いつのまにか新年になりました。新年を迎え、神様の恵みが皆様と皆様のご家庭に満ちあふれますようにお祈りいたします。

コロナ・ワクチンの接種は始まりましたが、ワクチンの副作用も憂慮されますし、感染力が強い変異種が流行っているとのニュースもあり、不安は続いています。世界経済恐慌が起こるかもしれないという不安と、別の禍が起こるかもしれないという不安もあります。けれども憶えてください。「恐怖は、ウイルスより早く感染します」。

ところで、私たちが感じる不安は、ただコロナによるものだけでしょうか。もう少し深く考えてみると、不安は人間の根本的な問題なのかもしれません。何か分からない不安が胸の奥深くに巣くっているにもかかわらず、これまでそれをあまり意識せず生きてきて、コロナをきっかけに表面化したのかもしれません。ある神学者は、「人間が感じる不安は、エデンの園から追い出された存在として胸の中に抱いて生きていかなければならない運命である」と言いました。それゆえ、この不安から逃れるためにはエデンに向かう心の足取り、神様に向かう心がもっと重要であるかもしれません。早くから不安について哲学的な思惟をしてきたキェルケゴール(Kierkegaard)は、「神様を信じ、自分の人生を神様に委ねて生きていく時、不安から脱することができる」と述べました。

けれども、今日ご一緒に読んだ福音書を通して私たちが不安を感じます。「ヘロデがこの子を探し出して殺そうとしている」という主の天使のお告げを聞いて、その夜あたふたとエジプトに逃げなければならなかったヨセフとマリアの様子が想像できるからです。その時彼らを感じた不安は、コロナ禍の中で感じている私たちの不安よりもはるかに緊迫していたことでしょう。

けれども、ヨセフとマリアを感じた不安は、この時だけのものではなかったはずで、ヨセフとマリアはすでに以前から不安を感じていました。マリアはおとめなので、子供を産むようになるという天使のお告げを通して不安を感じたでしょう。遠くに住む親戚のエリサベトを訪ねたのも、不安であるから助けを得るためだったかもしれません。そして、ベツレヘムで子供が生まれた時も同じです。子供を産むことができる部屋が見つからなかった時の不安は、言葉には表現できないほどだったでしょう。ヨセフも同じです。天使が現れ、マリアを妻に迎えるようにと伝えられた時、当惑し、不安だったでしょう。自分の子供でもない子供と共に暮らしているという周囲の冷ややかな視線も意識したことでしょう。マリアと仲良

く暮らすことができるかということも不安だったでしょう。そして、ベツレヘムで部屋が見つからず村を転々としましたし、子供を産んだ後羊飼いと東方の博士たちの突然の訪問への戸惑いもあるでしょう。

さらに、ヨセフとマリアが感じた不安は、これだけにとどまりませんでした。ヘロデが子どもを殺そうとしているという話を聞いた時、子供だけでなく家族全員が死ぬかもしれないと思ったでしょう。天使が「エジプトに行きなさい」と言った時はどんな気持ちだったでしょうか。彼らは暗い夜道にも急いで出かけなければなりません。ガリラヤという田舎で暮らしていたヨセフやマリアにとって、エジプトは遠い異国の地であり、全く不慣れなところです。言葉も、文化も、生活のやり方も、信仰生活も全く違います。そこには彼らを助けてくれる人もいません。そこでどんな仕事をしながら生きていけば良いのか漠然とし過ぎています。彼らは貧しい亡命者、難民です。エジプト人は貧しい難民に優しく接してくれるはずありません。もしかしたら迫害されたり、差別されるかもしれません。このような不安のうちに、自分に迫りくる運命を恨んだかもしれません。どうしてこのような試練をお与えになるのだと神様に聞きたかったでしょう。

それなのに聖書にはヨセフやマリアの不平や不満が一言も記されていません。彼らは神様に、どうしてこのような重荷を背負わせるのかと抗議もしませんでした。ヨセフとマリアは、自分の人生に差し迫る不安な現実を淡々と受け入れたのでしょうか。そうだとすれば、どうしてヨセフやマリアは自分に迫ってきた運命のような不安を淡々と受け入れることができたのでしょうか。それは、神様はいつもご自分を信じて従う民らを守ってくださるという信仰があったからです。

私たちは今日ご一緒に読んだエレミヤ書を通してこの信仰がどのようなものであるか分かります。エレミヤ書には、イスラエルの民らがバビロンに捕虜として連れて行かれたけれども、まもなく彼らが自分の国に戻ってくるということが記されています。当時、バビロンに捕虜として連れていかれたイスラエルの民が自分の国に帰るということは、想像すらできないことでした。けれども神様は預言者エレミヤを通して、救いの出来事が起こるということをこのように示してくれました。

「見よ、私は彼らを北の国から連れ戻し、…彼らは大いなる会衆となって帰って来る。…わたしはイスラエルの父となり、エフライムはわたしの長子となる。」(エレ 31:8-9)。

ここに記されているエフライムという言葉はイスラエルと同じ意味です。エフライムは、ヨセフがエジプトで授かった二人目の息子であり、エフライムはその後イスラエルの12部族のうちでもっとも力のある部族となり、イスラエルという言葉の代わりに使われたこともありました。このイスラエルの民らのための神様の約束は成就されました。イスラエルの民はバビロンから帰ってきたのです。ヨセフやマリアは会堂の礼拝に出席した時、このエレミ

ヤ書のみ言葉を聞いたでしょうし、神様が自分の先祖にしてくださった神様の約束を記憶し、自分にもその約束が成し遂げられることを信じていたでしょう。そして、その信仰があったからこそ、不安な現実の中でも淡々とエジプトに向かって旅立つことができたのでしょう。

さて、このような神様の救いの約束は、すでにアブラハムとヤコブとダビデを通して脈々と続いてきたものです。そして、この約束はいつも成し遂げられました。私たちはそれを今日ご一緒によんだエフェソ書を通して分かります。エフェソ書にはこのように記されています。

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」(エフェソ 1:4)

私たちのための神様の愛と救いへの計画はすでに用意されています。ですから私たちは安心して生きていくことができます。

ことに私たちは、今日ご一緒に読んだ福音書を通してヨセフがどのような心を持ってこの信仰を守っていたのかが分かります。それを理解するため、まず福音書に記されている「起きる」という言葉に注目してください。この言葉はギリシャ語で「復活する」という言葉でもあります。ここでの復活とは、神様の約束を信じて不安な現実を乗り越えることでしょう。天使はこの復活の出来事のため、ヨセフに二度も「起きて」と言いました。このお告げにヨセフも2度も「起きました」。ついに私たちはこの「起きる」姿を通してヨセフが神様のみ旨に忠実に従い、その結果不安の現実を乗り越え「復活の恵みにあずかった」ということが分かります。

しかし、この「起きて」というメッセージがヨセフとマリアだけのためのものでしょうか。主の天使は時代を超えて私たちにも「起きなさい」という神様のメッセージを伝えています。それゆえ、私たちは「起きて」、神様のメッセージに従う時、どのような不安と困難な現実も乗り越えることができます。覚えてください。神様はどのような不安な現実の中でもいつも私たちを立たせてくださいます。

そしてここにもう一つ注目すべきことがあります。それは、今日ご一緒に読んだエフェソ書に私たちの信仰をさらに堅固にしてくれる、祝福に祝福を重ね、増し加えてくれるみ言葉がこのように記されている、ということです。

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように。」(エフェソ 1:17-19)

これは信仰をもって生きていく人々に与えられる特権でもあります。そして皆さんが特権の主人公でもあります。ですから、このみ言葉にたより、力を得、恐れと不安で大変なこの世の中でも、堂々と生きていってください。神様は皆様に力と勇気を与えてくださり、恐れと不安も取り除いてくださるでしょう。

もう一度、新しく迎える一年、信仰をもって恐れと不安を乗り越え、恵みのうちに過ごす日々になりますように心よりお祈りいたします。